

ウィルキンソンタンサン 「二番目の彼女にしてください」 (2、3分)

NA：恋は人を変える。(主人公ノリコの声。以下同じ)

高校の放課後。窓際の席から何気なくグラウンドを眺める女子高生、ノリコ。

グラウンドではサッカー部が部活中。

そのキャプテンがシュートを決める。

風が吹く。カーテンがなびく。彼女は恋におちた。

ノリコ 「かっこいい」

その友人 「やめときなよ」

ノリコ 「なんで」

その友人 「桐山先輩、彼女いるよ」

グラウンド。二人でフェンスの外から桐山先輩を見に行く。

多数の女子たちがキャーキャー言っている。

その中にひとときわ美人が佇んでいる。

友人 「あの人」

ノリコ 「なにが？」

友人 「彼女さん」

ノリコ 「……」

NA：恋は人を変える。

美容院。メガネをコンタクトにし、黒髪を茶髪に、かわいくして綺麗になる。

ノリコ 「…よし」

校舎裏に桐山先輩を呼び出した。

桐山先輩 「なに？」

ノリコ 「私、桐山先輩が好きです」

桐山先輩 「俺、彼女いるの知ってるよね？」

ノリコ 「それでもいいんです」

桐山先輩 「？」

ノリコ 「二番目の、彼女にしてください」

桐山先輩 「…」

ノリコ 「ダメですか？」

河原。二人、手をつないでデート気分。

桐山先輩にメールが。それを見る桐山先輩。

桐山先輩「あ。ごめん、彼女迎えに行かなきゃ」

ノリコ 「うん。今日は楽しかった」

桐山先輩「じゃね」

別れ際にキスをする桐山先輩。去る。

ノリコはそれだけでうれしそう。

海。ノリコと友人がだべっている。

ノリコ 「でもね、私、二番目の彼女じゃなかったの」

友人 「どういうこと？」

その後、あとをつけたら、桐山先輩は別の女と会っていた。

NA：恋は人を変える。

桐山先輩のあとをつける日々。

別の女と会ってる。

別の女と会ってる。

メールを見て、彼女にしたのと同じように女にキスし、その場を去っている。

河原でノリコと桐山先輩が手をつないでデート中。

ノリコ 「ねえ。本当は私は何番目の彼女？」

桐山先輩「どういうこと？」

ノリコ 「私、知ってるよ。ほかの女の子にも『二番目』って言ってるんでしょ。『二番目』はたくさんいるんでしょ」

桐山先輩「きみは二番目の中の一番」

ノリコ 「うそ」

キスする桐山先輩。許してしまうノリコ。

海に戻る。

友人 「だからやめとけて言ったのに」

ノリコ 「でも好きなんだもん」

友人 「別れないの？」

ノリコ 「…（涙目になってくる）」

友人、ウィルキンソンを出して彼女に渡す。

ノリコひとくち飲んで、炭酸のキツさに最初は顔をしかめる。

二口、三口飲んで、すこしずつ落ち着きを取り戻す。ぐびぐびのむ。

友人 「涙目は、ウィルキンソンのせいにな」

ノリコ 「…やめとく」

友人 「つきあうのを？ 別れるのを？」

ノリコ 「…」

友人 「どっちよ」

ノリコ 「もう決めた」

海に向かって走り出す。

友人 「だからどっち」

NA：恋は人を変える。

よかれ悪しかれ、人は決断するからだ。

私は、次の一步を踏み出すと思う。

裸足で波とたわむれる二人。キヤーキヤー言う。

ノリコはウィルキンソンを飲む。

炭酸キツくて涙目になって、でも笑う。

コピー：涙目は、ウィルキンソンのせいにな。

商品、その上へのる。

ビールを飲んだり酒を飲んで、  
ストレス発散やダークな気分になるほどではない気分。

ウエットよりドライに前向きになりたい気分。

ベタ甘より、クールでいたい気分。

そんな読後感が、商品の気分だと思う。

(注：ラストをピアノのしっとりで終わらせるのではなく、  
レニークラヴィッツを流してもとても合うと思う)

(注：女子高生用のドリンクでないのは当然だが、  
女子中高生が共感するというより、  
こういう話はイケメンに恨みを持つてる男子により響くものだ。  
しかもオンタイム中高生でなく、もっと大人の、  
ターゲット世代の過去の傷に刺さりがちである。  
そのノスタルジック感や女子高生ビジュアルを嫌うなら、  
大学のサークルの話にしてもよい)